

可卜靈地、謂湯出州新磯濱二色浦片平郷是有緣之地形也、我本自在西天所好玩、恬子波藻以其種子兼蒔植于彼地、又兼令化出靈湯、已託宣事終、神鏡乘飛龍之背翔虛空、到山頂係松朶、爰仙童老巫并勅使等瞻光雲之聳、効香郁之薰、尋入當山、凡青巖側立峨々、祥樹茂生森々、履蘿徑跨谷澤、遂而攀登日金之巔、夫爲山之體、望離白浪之海蒼々、顧坎翠嶺之岫峻々、水石聳湛、林花開結、乾坤虎蹲、震兌龍偃、靈湯沸涌、神峒香洞、奇仙異人、卜宅連々、天地之間無地于比之。

〔古史傳神代〕伊豆風土記に、走湯者不然、養老年中開基とあるは、箱根山なる湯どもは、伊豆國の神湯を元湯にして、此の二柱神の始、給へるなれど、走湯は此二神の始、給へる湯には非ず、元正天皇の養老年中に開基たる湯ぞと云るなり、行囊抄に、舊記云、仁明天皇承和二年、豆州温泉出れば、風土記に、養老年中と云るに依るべし、箱根の湯をも、養老年中に万卷上人が開けるよし、彼山の縁起に見え、熱海の湯も、彼僧が開ける由なれば、此も彼が開けるならむも亦知べからず、こは伊豆山とも、走湯山とも云山にて、熱海の北に當りて、共に伊豆國加茂郡なり、箱根より南の山なるが、海にさし出て、山中に湯あり、謂ゆる走湯是なり、此山に座す神を走湯神と申す、

〔丙辰紀行〕走湯山

走湯山は、伊豆の山の事にて侍る、爰にまします神をば走湯權現とぞ申しける、昔鎌倉右大將伊豆箱根を信じ、常に蘋蘩の禮をいたし給ふ、二所參詣といへるは是なり、此ところに出湯あり、石はしる瀑の如し、走湯の名も温湯によりての故にや、又一里許西に温泉あり、その所を熱海と名づく、人のよろづの病あるもの浴すればたゞ驗あり、先年余も人にさそはれて湯に入り侍りし、其湧く所を見るに、潮の進退によりて、岩の間より烟むしあがりて、人の近づくべくもあらぬほどあつきに、熱湯わき出て流れ走るを、笕をかけて家々にとり、槽に湛えて人々に入らせけり、

絶境靈蹤亘古今、尋名吾輩亦登臨、走湯權現救人處、便是驪山神女心、

〔集古文書三十七〕北條氏康定狀 伊豆國伊豆山般若院藏